

十和田市立新渡戸記念館所蔵の 幕末蝦夷地関係絵図の書誌的検討

戸祭由美夫・出田和久・平井松午
小野寺淳・中西和子

- I. 本稿の目的
- II. 盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図の現状
- III. 新渡戸記念館設立の経緯と館蔵の盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図の概要
 - (1) 新渡戸記念館と新渡戸十次郎
 - (2) 新渡戸記念館所蔵の盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図の概要
- IV. 新渡戸記念館所蔵の盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図の特徴
- V. 他機関所蔵の盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図との比較
 - (1) 盛岡市中央公民館所蔵絵図との比較
 - (2) 函館市立中央図書館所蔵絵図との比較
- VI. 盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図に関する今後の検討課題

I. 本稿の目的

江戸時代後半における欧米列強の日本近海への進出に伴う外交・軍事的緊張のなかで、幕府は寛政11年(1799)～文政4年(1821)と安政元年(1854)～明治元年(1868)の2時期にわたって、箱館奉行の下で蝦夷地の直接統治を行うとともに、東北諸藩(弘前[津軽]・盛岡[南部]・仙台・会津・秋田[久保田]・鶴岡[庄内])及び蝦夷地の松前[福山]藩に蝦夷地沿岸部の防備を下命した¹⁾。上記の2時期

をそれぞれ蝦夷地の第1次幕領期、第2次幕領期と呼んでおく²⁾。幕府によるこのような蝦夷地政策に基づいて、過酷な気候条件の下で蝦夷地に赴いた東北諸藩の藩士によって、新設された陣屋などの軍事施設³⁾の建設プラン図や各藩の警備担当地の沿岸図、さらには蝦夷地ないしその周辺地域に関する絵図などが作成され、筆写された。現在もそれら多種・多様な絵図⁴⁾が、函館市や東北地方諸都市の図書館・博物館・公文書館・公民館など、あるいは北海道大学北方資料室や国立公文書館などに、一部未整理のまま保存されている。

ところで、近世に日本で作成された絵図類に関しては川村博忠による概説書がある。そのなかで川村は、近世絵図の種類を一般図と主題図に大別した上で、それらの主要なものとして前者では村絵図・郡絵図・国絵図を、後者では田畠絵図・道中絵図・海辺絵図・川普請絵図・水損所絵図・新田絵図・論所絵図を挙げている⁵⁾。そして、近世絵図のそれら個々の種類に焦点を当てた矢守一彦、川村博忠、小野寺淳、国絵図研究会、鳴海邦匡などによる論著が出版されている⁶⁾。しかし、幕末の蝦夷地を対象とする絵図に関しては、川村の上記の概説書でも特には言及されておらず、従来の研究は皆無といってよい状況にあ

キーワード：古絵図、蝦夷地、幕末、[南部家]盛岡藩、新渡戸記念館

る。近世に作製された彩色図のなかで川村が、「近世絵図」の範疇ではなく一般図の範疇に入るとした日本図や世界図に目を向けても、北東アジアの探検史と地理的世界の拡大といった面からの船越昭生や秋月俊幸による論著や⁷⁾、高倉新一郎や高木崇世芝による資料集も刊行されているが⁸⁾、それらにも東北諸藩が作製した絵図は触れられていない。また近年刊行の地方史誌では、優れた地図篇が別冊の形で編集されるようになり、そのなかには多くの近世絵図が大判のカラー印刷で収められるようになったが⁹⁾、北海道の地方史誌において幕末の絵図を複製して掲載した例は五稜郭関係のみとあってよい¹⁰⁾。絵図の刊行に限れば、函館市立中央図書館所蔵の主要な絵図をカラー図版で収載する吉村博通の撮影成果¹¹⁾が今なお唯一のものであり、同館によるデジタル化された館蔵古地図データベース¹²⁾も端緒についた段階である。

以上のように、幕末蝦夷地の絵図に関してはほとんど研究されておらず、その所在や精確なりストすら未だに明らかになっていない。国絵図研究会の活動をもとに、小野寺淳は近世絵図史料論の構築に6つの課題を挙げているが¹³⁾、なかでも「古地図の体系化と所在データベースの構築」は基本的な作業といえよう。

本稿はこのような研究状況を踏まえ、近世絵図の具体的な事例研究として、今まで紹介されてこなかった盛岡〔南部〕藩（以下、盛岡藩と記す）によって幕末期に作製された蝦夷地関係の絵図を対象とし、特に十和田市新渡戸記念館（以下、特別に正式名称が必要な場合を除いて新渡戸記念館と略称する）所蔵の該当絵図に焦点を当てて、書誌的な視点から詳細な検討を加えることにより、幕末蝦夷地関係絵図全般に関する今後のさらなる研究の進展や、これらの絵図を活用した歴史地理研究にも寄与したい。

II. 盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図の現状

盛岡藩は、弘前〔津軽〕藩とともに第1次・第2次の2度の幕領期に蝦夷地防衛の任務を幕府から命じられ、その任務遂行に関わって多数の絵図を作製した。それら当時の資料として貴重な絵図の過半は、藩の葉草園に由来する地に建てられて藩政期の資料や文化財を保存・公開している盛岡市中央公民館に蔵されているが¹⁴⁾、第2次幕領期に蝦夷地に派遣された藩士一行の次席責任者たる新渡戸十次郎の遺品を保存・管理する新渡戸記念館や¹⁵⁾、盛岡藩の支藩たる南部八戸藩関係の資料を継承する八戸市立図書館にも、それら絵図の一部が保管されている。

これら盛岡藩作製の幕末蝦夷地関係絵図のうちで、盛岡市中央公民館所蔵のものは、当館目録の「海防」35-5の分類の中に、一枚ごとに、あるいは複数の絵図を一括りにして、資料番号を付して整理されている。しかし、資料名・資料番号の異なる絵図群の中に同じタイトルの図が多数含まれており、詳しい調査を必要とする。一方、八戸市立図書館所蔵のものに関しては、青森県立郷土館の調査によって図の名称・寸法などがリストアップされているものの、県外対象の絵図という理由から、内容の検討はなされていない¹⁶⁾。さらに、新渡戸記念館のものに関しては、図名リストや内容の公表も未だになされていないようである¹⁷⁾。

盛岡藩作製幕末蝦夷地関係絵図の上述のような所蔵状況と研究調査の成果を勘案して、未調査の新渡戸記念館所蔵絵図に関する予備調査（戸祭1名）を2007年4月12日に、本調査（戸祭・出田・平井・小野寺の4名ほか）を同年8月9～10日に実施し、対象となる絵図を閲覧・撮影するとともに、それら絵図の内容を整理した。次のIII章及びIV章では、その調査に基づく同館所蔵絵図の概要と特徴を記すことにしたい。

Ⅲ. 新渡戸記念館設立の経緯と館蔵の盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図の概要

(1) 新渡戸記念館と新渡戸十次郎

十和田市立新渡戸記念館は、青森県十和田市東三番町の太素塚地内にあり、十和田市三本木原台地一帯の開拓を主導した盛岡藩士の新渡戸 傳・十次郎親子と国際連盟事務次長を務めた農政学者の新渡戸稲造の遺品や関係資料を保管・公開している¹⁸⁾。その太素塚の新渡戸記念館前には、彼ら3名を顕彰する像が建てられている(図1参照)。

新渡戸十次郎(1820～1867)は、花巻新渡戸家8代目の新渡戸 傳の長男として文政3(1820)年に花巻に生まれ、祖父の維民(1769～1845)や父の傳(1793～1871)と同様に兵学に通じ、軍事・土木技術者としても産業開発・経営政策者としても盛岡藩政に貢献している¹⁹⁾。彼は、安政2年(1855)に盛岡藩の



図1 太素塚地内の新渡戸十次郎の像(2007年4月、戸祭撮影)

警衛地となった蝦夷地南西部へ調査のために派遣された一行(以下、蝦夷地調査団と呼ぶ)の次席責任者として、藩の勘定奉行兼陣場奉行之役職のまま蝦夷地に赴き、箱館で幕府奉行所や他藩と折衝しつつ、元陣屋予定地²⁰⁾の箱館水元をはじめ、渡島半島の津軽海峡沿岸および噴火湾岸までを調査した。この蝦夷地調査団の調査成果は、一連の絵図にまとめられて藩に提出された。また、この調査に関して彼は『松前持場見分帳』という丁寧な記録も書き残しており、同じく新渡戸記念館に保管されている²¹⁾。なお、蝦夷地から帰国後、彼は同藩の太平洋沿岸防備を目的とした砲台場の建設責任者となり、それらの砲台場に関する一連の絵図も作成している²²⁾。

(2) 新渡戸記念館所蔵の盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図の概要

さて、新渡戸記念館に現在保管されている新渡戸十次郎旧蔵の盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図は合計29枚で、分類Ja1・登録番号379～402の24枚、分類Ja1・登録番号647〔摘要:A36〕の1枚、分類ナシ・登録番号345〔摘要:館長室書庫1-81〕の4枚に分けられる。このうちで前者の24枚は、保管の面から、登録番号379～389〔摘要:C2-32～42〕と登録番号390～402〔摘要:C2-43～55〕とに分けて一括りにされている。これら29枚の絵図を、その登録番号順に図名〔外題:内題〕と展開法量を記すと、表1のようになる。

安政2年に幕府より下命された盛岡藩の警衛地域が箱館および恵山岬より幌別までの東蝦夷地であったこと²³⁾を念頭において、上記の29枚の絵図を描かれた対象・地域の点から分類すると、次のように区分するのが適当であろう。

A: 盛岡藩の警衛対象指定地域へ派遣された蝦夷地調査団による踏査・測量図

A1: 警衛対象指定地域に建設予定の陣屋・台場・番所などに関する現地測量図

表1 新渡戸記念館所蔵の盛岡藩幕末蝦夷地絵図29枚の図名〔外題：内題〕と展開法量

登録番号	題名〔外題：内題〕	法量 (cm)
345(1)	松前圖 此図箱館奉行処控之／図ヲ御借請ニテ写取之：(内題ナシ) 〔全体図〕	184.0×240.4
345(2)	松前圖 此図箱館奉行処扣之／図ヲ御借請ニテ写取之／三枚之内： (内題ナシ) 〔北海道東部より南千島〕	102.5×127.0
345(3)	松前圖 此図箱館奉行処扣之／図ヲ御借請ニテ写取之／三枚之内： (内題ナシ) 〔北海道西部より下北〕	111.8×128.0
345(4)	松前圖 此図箱館奉行処扣之／図ヲ御借請ニテ写取之／三枚之内： (内題ナシ) 〔北海道北部より南樺太〕	139.8×77.0
379	箱館表水元御陣屋建図：(内題ナシ)	67.3×175.5
380	箱館御陣屋御引請地処繪圖 一間／二分積 乾：箱館御陣屋御引請地処 繪圖面但一間二分積	128.3×153.8
381	箱館山掛圖 一之内：(内題ナシ)	94.0/40.0×114.0
382	箱館表縮圖：(内題ナシ)	40.0×41.8
383	箱館表水元御陣屋縮図／坤ノ一：(内題ナシ)	51.2×84.4
384	箱館表水元御陣屋建図：(内題ナシ)	64.7×164.0
385	箱館表之圖 一：(内題ナシ)	116.0×179.0
386	箱館澗内亀田ヨリ七重濱迄之図 二：(内題ナシ)	81.0×201.0
387	箱館澗内三ツ森ヨリ戸切津川迄之図 三：(内題ナシ)	77.5×161.8
388	箱館澗内三ツ谷ヨリ矢不來迄之図 四：(内題ナシ)	77.5×158.6
389	箱館澗内茂部地ヨリ當別迄之図 五／終：(内題ナシ)	81.2×130.0
390	カラフト圖 此図箱館奉行処扣之／図ヲ御借請ニテ写取之：(内題ナシ)	129.7×260.8
391	東蝦夷地野田追ヨリニクルウトル迄之図 三：(内題ナシ)	73.4×138.0
392	東蝦夷地シツカリヨリヲサルヘツエントモノ崎迄之図／四：(内題ナシ)	73.8×121.0
393	東蝦夷地ヲサルヘツヨリフシコヘツ迄之図 五／終：(内題ナシ)	89.0×138.3
394	東蝦夷地エトモ御臺場御番処之図：東蝦夷地エトモ／エトモ埼／字ホロ シレトル崎／御臺場御番所之圖	51.0×62.5
395	東蝦夷地エトモ字ホロヘケレウタ陣屋建家之図：(外題と同一)	128.0×136.0
396	東蝦夷地ホロヘケレウタ御陣屋見立場処図：東蝦夷地モロラン之内ホロ ヘケレウタ申処／御陣屋見立場処繪圖面 但百間五寸積	66.3×92.8
397	東蝦夷地砂原陣屋建家之図：(外題と同一)	102.7×106.7
398	東蝦夷地ヲシヤマンヘ陣屋建家之図：東蝦夷地ヲシヤマンヘ陣屋建家之 図	77.5×90.0
399	東蝦夷地エトモ御番処之図：東蝦夷地エトモ／字ヲエナオス遠見所／字 ワシヘツ警衛所／御番所之圖	51.5×57.0
400	蝦夷地附御留守居処之図：(内題ナシ)	60.4×56.8
401	東蝦夷地山セ泊ヨリテケマ迄之図 一：(内題ナシ)	62.0×123.0
402	東蝦夷地ヌマシリ野田追崎迄之図 二：(内題ナシ)	62.0×139.0
647	(外題ナシ)：松前城下／臺場形勢略圖	43.0×106.0

なお、配列は登録番号順とし、図名の「／」は改行箇所を示す。全図1枚と3枚1組の分割図からなる345に関しては、便宜的に(1)～(4)の枝番を付し、描図範囲を〔 〕内に記した。

A1a：箱館地区に建設予定の陣屋・留守
居所に関する現地測量図…5枚 (379,
380, 383, 384, 400)

A1b：噴火湾沿岸に建設予定の陣屋・台
場・番所などに関する現地測量図…6
枚 (394, 395, 396, 397, 398, 399)

A2：警衛対象指定地域の踏査絵図

A2a：箱館および箱館以西、津軽海峡北岸の松前藩警衛地との境界までの踏査絵図…7枚（381, 382, 385, 386, 387, 388, 389）

A2b：箱館以東、渡島半島東南岸から噴火湾沿いにエトモ（絵鞆）半島を廻って伊達仙台藩警衛地との境界までの踏査絵図…5枚（391, 392, 393, 401, 402）

B：蝦夷地警衛に関わって書写した蝦夷地の絵図

B1：蝦夷地の全図…4枚（345(1), 345(2), 345(3), 345(4)）

B2：北蝦夷地（樺太）の図…1枚（390）

B3：松前の図…1枚（647）

なお、以下Aグループ、A1サブグループ、A1aサブグループ等と呼ぶことにする。

IV. 新渡戸記念館所蔵の盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図の特徴

近世絵図の個々の特徴を捉えるためには、近世絵図全般にわたって比較しうる基本データを正確に把握することが必要である。筆者たちの共同研究グループでは、北海道・東北各地所蔵の幕末蝦夷地関係絵図の調査にあたって、徳島大学附属図書館所蔵の古地図・絵図コレクション調査カードとして平井松午が独自に考案・作成したA4判の絵図調査票を用いた²⁴⁾。この絵図調査票は、絵図の名称、形状、展開法量、体裁、紙質、保存状態、作成年月日、作成者、仕様、形式、表現、記載範囲、縮尺、凡例、方位、注記、印影など40項目からなっている。しかし、本稿で扱う盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図の場合、同一のタイトル・描画内容をもつ複数の絵図を的確に識別する必要があるため、その絵図調査票のみでは不十分であることが明らかになってきた。そのため、当初の絵図調査票40項目の分類をより詳細にしたり、新たに項目

を設けたりした。例えば、表紙の模様、題簽の形と模様、外題・内題の字体、蔵書印の種類とその押印位置、図中の公式の由緒書きの有無、彩色の丁寧さ・鮮やかさ、といった点である。

上記のような多くの調査項目について新渡戸記念館所蔵絵図を調べて明らかとなった特徴を、他の2機関に所蔵されている同種の絵図との比較も念頭に、以下の4点に絞って記すことにする。

第一に、表紙および題簽に注目すると、表紙および題簽を欠く647以外の379～402, 345(1)～345(4)の28枚は全て、薄茶色で不揃いな幅の横縞模様の表紙（16.5cm×26.2cm程度）に、薄桃色で模様ナシの短冊簽が貼り付けられ、その上に太い独特の明朝体で図名（外題）が記されている（図2A参照）。これら外題を有する28枚のうちで図中に内題も記



図2A 398（十和田市立新渡戸記念館所蔵）の表紙と題簽

されているのは380, 394~399の7枚で、その字体は太い独特の行書体である(図2B参照)。内題を有するこれら7枚のうちで、380を除く他の6枚は、前章(2)で記した分類のA1bサブグループと一致する。さらに外題と内題とを対照してみると、394, 396, 399の3枚の場合には、内題のほうが外題よりも当該軍事施設の名称や位置を詳しく記している。なお外題のない647では、内題が図の右上に達筆とはいえない楷書体で記されている。

第二に、当初の所蔵者が新渡戸十次郎であり、彼が盛岡藩によって派遣された蝦夷地調査団の次席責任者であったことに着目したい。その派遣目的に添った調査成果の最大のものが、警衛対象指定地域の踏査絵図と、陣屋・台場などの軍事施設建設予定地の測量図

であった。したがって、その成果たることを明示する記載の有無が分類にとって重要であると考えられる。この場合にはそれが、「箱館表并東蝦夷地御持場処見分測量之上取調之。 蝦夷地附御留守居御目付兼 上山半右衛門、御勘定奉行陣場奉行兼 新渡戸十次郎、締役扱役兼 澤出善平 谷崎善六、御徒目付 氣田庄之丞、御勘定方 星川左仲太長澤文作」という文面であって、絵図の作成目的をまず記した後に、蝦夷地調査団の筆頭責任者たる上山半右衛門以下6名の役職と氏名が列記される体裁をとっている。この文面(以下、「公式の由緒書き」と名づける)が図の奥書として図中の空いたスペース、多くは右下に配され、役職と氏名が全てそれぞれ改行されているほか、作成目的も縦方向のス

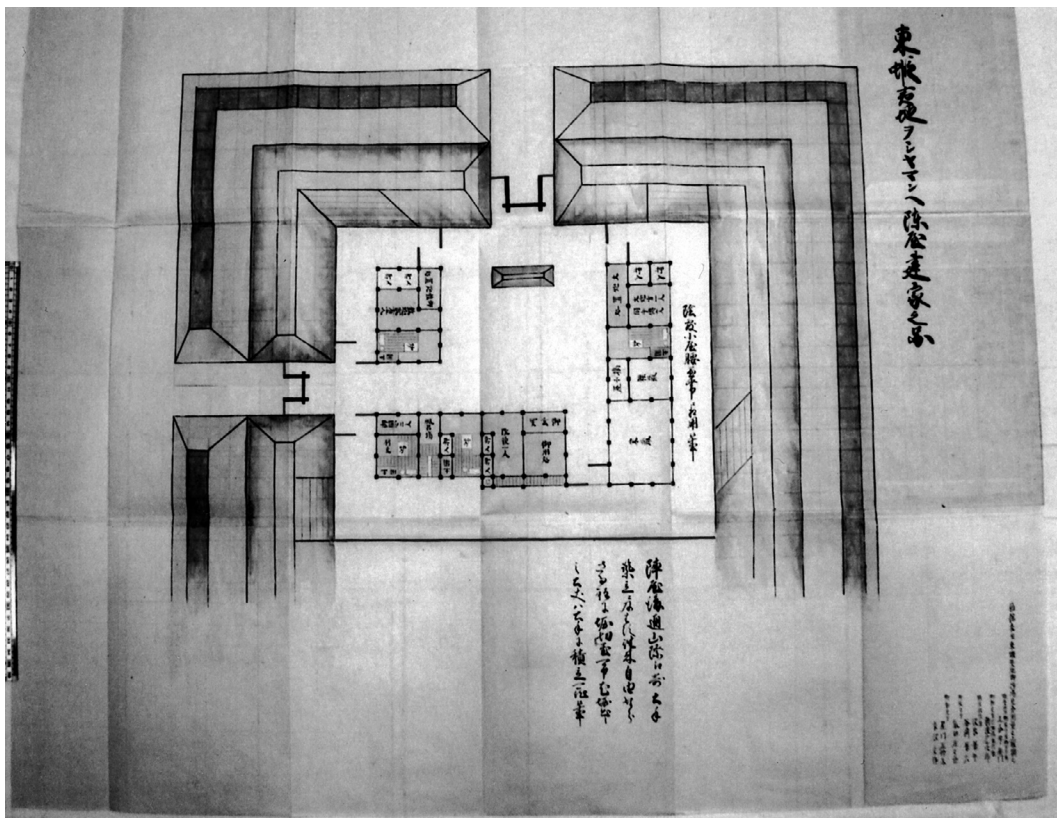


図2B 398 (十和田市立新渡戸記念館所蔵) の図面

ペースが狭い場合には2行に分けて記されている。その字体は独特な細い明朝体である。

このような公式の由緒書きを奥書として有するのは379～389, 391～402の23枚で(図2C参照), 一方, 390, 345(1)～345(4), 647の6枚にはこのような奥書がない²⁵⁾。そして, 前者の23枚が前章のAグループ(A1a～A2b)と, 後者の6枚がBグループ(B1～B3)に完全に一致する。

また, 公式の由緒書きのないBグループの絵図6枚のうちで, 345(1)～(4)と390の5枚に関しては, その由来が「此図箱館奉行処控之図ヲ御借請ニテ写取之」と題簽に明記されていることが注目される。すなわちこれら一連の「松前図」及び「カラフト図」は, 蝦夷地警衛にあたっての参考のために幕府箱館奉行所から借用・書写したものと考えられる²⁶⁾。なお, Bグループの残る1枚(647)に関しては, 同絵図にその由来も記されておらず,

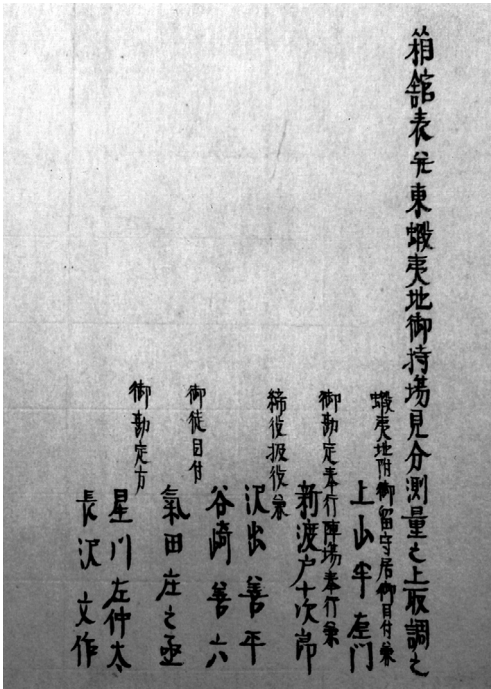


図2C 398(十和田市立新渡戸記念館所蔵)の図の右下に記されている公式の由緒書き

盛岡藩が派遣した蝦夷地調査団も松前城下に立ち寄っていないようなので²⁷⁾, なぜ他の28枚とともに新渡戸十次郎が所持していたのかは今のところ不明である。

第三に, 図中の彩色の丁寧さや鮮やかさを検討してみると, 全般的には丁寧で落ち着いた彩色といえるものの, 仔細に見れば, 描かれている対象の違いもあって, 海面の着色にムラがあったり(390, 391, 401, 402, 345(2), 345(3)), 陣屋などの囲郭の堀・土塁の斜面と平面の塗り分けが丁寧さを欠いたり(379, 384, 394, 397, 398, 399), 階段の段彩が不明瞭であったり(379, 383, 384), というような問題点が指摘できる。なかでも382と395の2枚は彩色も少々粗く, 396と400の2枚には汚れが目立つ。

第四に, 蔵書印や所蔵に関する付箋についてみると, 達筆とはいえない楷書体で「箱館御陣屋之図」と記された短冊形付箋の下部に「新渡戸氏」の黒印が押されているものが4枚(379, 380, 394, 399)あり, また「本家より送附分」との付箋が401に, その上半部が千切れたらしい付箋が400に付いている。このうち, 黒印の押された付箋に関しては, その有無が絵図の作成・書写時期の指標になるとは考えがたい。一方, 後者の付箋に関しては, 「本家」が花巻新渡戸家(後の東京新渡戸家)を指すのか, 盛岡の新渡戸家を指すのか定かでない²⁸⁾。また, 「本家より送附」されたのがこの2点のみなのか, なぜ「送付」されたのか, といった疑問についても今のところ不明である。

新渡戸記念館所蔵の盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図についての以上のような特徴から, 公式の由緒書きを奥書として有するAグループの23枚は, 内容・形式の両面から, 盛岡藩から派遣された蝦夷地調査団の使命に応える正規の踏査・測量図と看做しうる。さらに, 幕府箱館奉行所から借用・書写したBグループの「松前図」及び「カラフト図」も, Aグループ

プの23枚の参考図として、一括して蝦夷地調査団の報告書を形づくったと考えられる。しかし、この新渡戸記念館所蔵絵図が蝦夷地調査団の次席責任者たる新渡戸家に伝わるものであることや、図中の彩色の丁寧さや鮮やかさの点で、盛岡藩（主）へ提出された正式報告（正本）というには粗いといわざるを得ないことから、新渡戸十次郎による正本の写し（手控）と推定される。

そこで次章では、上述のような特徴を有する新渡戸記念館所蔵の絵図を、盛岡市中央公民館および函館市立中央図書館の所蔵絵図と比較することで²⁹⁾、新渡戸記念館所蔵絵図の盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図としての位置づけを明らかにしたい。

V. 他機関所蔵の盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図との比較

(1) 盛岡市中央公民館所蔵絵図との比較

まず、極めて多数・多様な盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図を所蔵する盛岡市中央公民館の場合についてみると、同館所蔵資料目録の「兵事－海防」部35-5の目録番号47～92に該当する合計139点³⁰⁾がある。それらのうちで、複数の絵図をまとめて目録番号と名称が付されているものを挙げるだけでも、「松前図」2点（目録番号35-5-47. 以下、M47と略記する）、「箱館陣屋図」3点（同35-5-53. M53と略記）、「箱館表諸絵図」11点（同35-5-58. M58と略記）、「東蝦夷地図」23点（同35-5-63. M63と略記）、「蝦夷地各陣屋図」6点（同35-5-65. M65と略記）、「蝦夷地関係図（蝦夷地御持場之図）」26点（同35-5-66. M66と略記）、「蝦夷地雑地図」5点（同35-5-67）、「蝦夷地雑地図」5点（同35-5-68）、「蝦夷地雑地図」13点（同35-5-69）、「蝦夷地雑地図」5点（同35-5-70）、「エトモホロベツ図」2点（同35-5-71）、「木古内ヨリフシコヘツ迄縮図」2点（同35-5-72）、「蝦夷地台場並大砲図」7点（同35-5-82）と多数にのぼる。その全容につ

いてはなお調査中であるが、新渡戸記念館所蔵の29枚の絵図と同タイトル・同内容のものをⅢ章のA1a-B3のサブグループごとに挙げれば、次のようになる（表2参照）。

A1aサブグループと対応するもの…M53

表2 新渡戸記念館所蔵絵図と他の2館所蔵絵図との対応関係

(イ)	(ロ)	(ハ)	(ニ)
A1a	380	58-11*,66-25	8
	379, 384	53-2*/+, 53-3*,65-5*	002901-1513-6012 (1,2)
	383	58-2*, 66-7	7
	400	66-10	21
A1b	397	63-4, 63-13*, 65-6*/+	16
	398	63-1, 63-6*, 65-4*/+	17
	396	63-3, 63-11	18
	395	63-9, 63-12*, 65-1*/+	15
	394	63-2*, 63-5	20
	399	63-8*, 63-10	19
A2a	385	58-3*, 66-19	1
	382	58-1*, 66-6	9
	381	58-8*, 66-20	2
	386	58-7*, 66-21	3
	387	58-4*, 66-22	4
	388	58-6*, 66-23	5
	389	58-5*, 66-24	6
A2b	401	63-14, 63-19*	10
	402	63-15*, 63-20*	11
	391	63-16, 63-21*	12
	392	63-17*, 63-22*	13
	393	63-18*, 63-23*	14
B1	345(2)		
	345(3)		
	345(4)		
	345(1)	47-1*, 47-2	
B2	390	63-7*, 66-16	
B3	647		

(イ)：新渡戸記念館所蔵絵図をもとにした分類

(ロ)：新渡戸記念館所蔵の絵図の登録番号

(ハ)：盛岡市中央公民館所蔵の同種の絵図の目録番号(35-5-以下の番号。なお、「南部家図書」印を有する場合には*印を付し、上山氏の蔵書印を有する場合には*/+印を付した。)

(ニ)：函館市立中央図書館所蔵の同種の絵図の請求番号(「南部藩蝦夷地経営図」として一括されている21鋪については002901-0495-5001-以下の番号を記す。)

(2点)・M58(2点)・M65(1点)・M66(3点)

A1bサブグループと対応するもの…M63(11点)・M65(3点)

A2aサブグループと対応するもの…M58(7点)・M66(7点)

A2bサブグループと対応するもの…M63(8点)

B1サブグループと対応するもの…M47(2点)

B2サブグループと対応するもの…M63(1点)・M66(1点)

B3サブグループと対応するもの…ナシ

これらのなかで、まずA1aサブグループ5枚の場合についてみると、図の名称と内容が同じ379と384の2枚には盛岡市中央公民館所蔵の3点に対応し、とも藩主たる南部家の蔵書印(「南部家図書」)が押されている³¹⁾。なかでもM53-2とM53-3の2点には、蝦夷地調査団の筆頭責任者たる上山半右衛門の蔵書印(「上山口蔵書印」)³²⁾も押されていることが注目される。

A1bサブグループ6枚の場合には、その全てが盛岡市中央公民館所蔵の複数の絵図と対応し、しかも必ずM63の中の2点がそれぞれ含まれる。しかも396を除いて、「南部家図書」印を有するM63の各1点と当該蔵書印を有しないM63の各1点が対をなしている。さらに395・397・398の3枚は、M63の各2点のほかにM65の各1点とも対応している。そしてそれら計3点のM65の絵図には、「南部家図書」印のほかに、上山半右衛門の上記の蔵書印と異なる「上山氏所蔵」という蔵書印³³⁾も押されていることは注意を惹く。

A2a及びA2bのサブグループの場合も、その全ての絵図が盛岡市中央公民館所蔵の複数の絵図と対応する。A2aサブグループ7枚の場合、全ての絵図で、M58の中の「南部家図書」印を有する各1点とM66の中の当該蔵書印を有しない各1点が対をなす。A2bサブグ

ループ5枚の場合には、絵図1枚に対して必ずM63の中の2点に対応する。そのうちの392・393・402の3枚では、対応するM63の各2点とともに「南部家図書」印を有するが、391・401の2枚では当該蔵書印を有するM63の各1点と当該蔵書印を有しないM63の各1点が対をなしている。

B1サブグループ4枚の場合には、全体図である345(1)のみM47の2点と対応し、そのうちM47-1は「南部家図書」印を有するが、M47-2は当該蔵書印を有しない。

B2サブグループ1枚(390)は、「南部家図書」印を有するM63-7と当該蔵書印を有しないM66-16の2点と対応している。

以上の事実を要約すれば、新渡戸記念館所蔵のAグループに分類される23枚全てが盛岡市中央公民館所蔵の複数の絵図と対応する。しかも396・400の2枚を除く21枚にあっては、それぞれが対応する盛岡市中央公民館所蔵絵図の中に「南部家図書」印を有する絵図1点以上を必ず含み、上山半右衛門の2種の蔵書印のいずれかを併せもつ絵図もA1サブグループではかなりある。また、Bグループの「松前図(全図)」と「カラフト図」も、Aグループの過半の16枚と同様に、「南部家図書」印を有する絵図1点以上を含む盛岡市中央公民館所蔵の複数の絵図と対応する。

これらの事実を基に、前章のまとめの部分で記した新渡戸記念館所蔵絵図に関する推定一同館所蔵のAグループ23枚とBグループの「松前図」及び「カラフト図」が蝦夷地調査団による正式報告(正本)の新渡戸十次郎による写し(手控)である一を想起すれば、新渡戸記念館所蔵絵図の個々と複数の絵図が対応を示す盛岡市中央公民館所蔵絵図の中に、藩(主)に提出された正本やその副本が含まれている可能性が高い。

また、上記の盛岡市中央公民館所蔵絵図の中には、「南部家図書」印とともに上山半右衛門の蔵書印をも併せもつ絵図も4点ある。

いま、1枚の絵図にこのような2種の蔵書印が押された順序を推測すれば、当初は上山の蔵書印のみが押されていた絵図に後に何らかの理由で「南部家図書」印も押された可能性が、逆の場合よりも高いと考えられる。この推定が正しければ、先に上山の蔵書印が押されたこれらの絵図は、藩(主)への正式復命報告ないしその副本とは別系統と考えるべきであろう。その場合、新渡戸十次郎と同様に、蝦夷地調査団の筆頭責任者たる上山半右衛門も正本の写し(手控)を所持していたことも十分に考えられるので、上山の蔵書印を有する絵図がそれに該当する可能性が高い。

(2) 函館市立中央図書館所蔵絵図との比較

次に、新渡戸記念館所蔵の幕末蝦夷地関係絵図を函館市立中央図書館所蔵の絵図³⁴⁾と比較すると(表2参照)、Bグループの6枚に対応するものは皆無であるのに対し、Aグループでは23枚全てに対応する絵図があり、そのうちの21鋪³⁵⁾は「南部藩蝦夷地経営図」(請求番号002901-0495-5001。以下、H5001と略記する)の名称を付された一連の絵図群の中にある。この「南部藩蝦夷地経営図」は計23鋪の絵図からなり、Aグループに対応する21鋪以外に、新渡戸記念館所蔵の絵図と対応しない「箱館表并東蝦夷地絵図」(H5001-22)と「勤番所土居図」(H5001-23)の2鋪を含む。これら2鋪のうちの前者(H5001-22)は、盛岡市中央公民館所蔵のM58-9・M66-18と対応しており、踏査・測量図の総括図というべき内容であることから、本来Aグループの巻首に置かれるべきものといえよう。一方、後者(H5001-23)は盛岡市中央公民館所蔵絵図のなかにも対応するものがない、独自の内容を有している。つまり、本稿の検討対象となった函館市立中央図書館所蔵の絵図計25鋪は、Aグループに対応する「南部藩蝦夷地経営図」21鋪、新渡戸記念館所蔵の絵図と対応しない「南部藩蝦夷地経営図」

2鋪、「南部藩蝦夷地経営図」以外でAグループに対応する2鋪の3つに区分される。

いま、これら計25鋪全ての絵図の奥書ないし注記などをみると、新渡戸記念館所蔵のAグループの絵図やそれに対応する盛岡市中央公民館所蔵の絵図では必ず奥書としてあった公式の由緒書きが全く見られない。H5001-1の絵図にのみ、図中の右下に横長の長方形の貼紙があって、前述の公式の由緒書きが記された後に、さらに括弧書きで「右ハ新渡辺文庫蔵書中ヨリ／写セルモノナリ」³⁶⁾と小さく記されている。同じH5001に属す他の22鋪には、このような貼紙さえない。この事実から、「南部藩蝦夷地経営図」の名で一括されているH5001の23鋪はおそらく、函館市立中央図書館の前身たる市立函館図書館による函館関係絵図の収集活動の一環として、大正14年設立の「新渡戸文庫」に収められていた一連の蝦夷地関係絵図から、同館で昭和12年6月に開催された展覧会以前に写されたと推定される³⁷⁾。

また「南部藩蝦夷地経営図」以外で、新渡戸記念館所蔵の379・384の2枚の絵図と対応する2鋪として「箱館御陣屋之図」と「箱館字水元曠野之内元陣屋之図」(ともに整理番号002901-1513-6012。以下、H6012と略記する)³⁸⁾がある。前者では「安政二年再度取建南部藩箱館御陣屋ノ／平面図ニシテ全三年三月上山半右衛門ノ手写」との注記が図名に続いて記され、その上方に「函館図書館蔵書」印が、下方に「上山口蔵書印」と「郷土資料函館図書館」の蔵書印が並んで押されている。一方後者では、「箱館御陣屋之図ト同一／蝦夷地御留守居所備付ノ／モノニシテ部屋割変更ノ付箋ノ二三アリ」との注記が図名に続いて記され、その上方に「函館図書館蔵書」印が、下方に「郷土資料函館図書館」の蔵書印が押されている。上山半右衛門が蝦夷地調査団の筆頭責任者を命じられるとともに蝦夷地留守居をも兼務していたことから、こ

のような注記や蔵書印を安政年間のものとするれば、H6012の2鋪は上山の所持・管理していた絵図と推定される。しかし、上述の昭和12年6月開催の展覧会に2鋪と同名の絵図2点(出品目録番号10, 11)が「伯爵南部家所蔵」として出品されており³⁹⁾、出品目録のそれら2点に付された説明文も上記2鋪に付された注記と同一ないし極めて近似しているにもかかわらず、その説明文には当時すでに市立函館図書館に同名の絵図が所蔵されていたとは記されていない。さらに、これら2鋪の上記注記が内題と同筆と判断できることや、それらと対応する新渡戸記念館所蔵の2枚(379・384)と異なって公式の由緒書きが記されていないことから、昭和12年6月の展覧会の折に、蔵書印も含めて極めて精巧に模写された写本である可能性のほうが高い⁴⁰⁾。

VI. 盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図に関する今後の検討課題

以上、新渡戸記念館所蔵の新渡戸十次郎旧蔵幕末蝦夷地絵図29枚について、盛岡市中央公民館および函館市立中央図書館に所蔵される同種の絵図とも対比しつつ、その特徴を検討してきた。その結果を要約すれば、次のようになる。

- ①新渡戸記念館所蔵の29枚の絵図のうち、「松前城下／臺場形勢略圖」を除く28枚は、盛岡藩警衛指定地域に関する踏査・測量図及び蝦夷地全般に関するその参考図として一括して蝦夷地調査団から藩(主)に提出された正式の復命報告(正本)の、新渡戸十次郎による写し(手控)であると推定される。
- ②新渡戸記念館所蔵の絵図29枚と盛岡市中央公民館所蔵の絵図を比較すると、前者の中の25枚がそれぞれ後者の複数の絵図と対応し、しかもその大部分は「南部家図書」印を有する1点を含む。それらの盛岡市中央公民館所蔵の絵図の中に、新渡戸十次郎が所持していた写しの原本たる藩(主)への正

式復命報告とその副本が含まれている可能性が高いと考えられる。

- ③また、新渡戸記念館所蔵絵図と対応する上記の盛岡市中央公民館所蔵絵図の中には、「南部家図書」印とともに上山半右衛門の蔵書印をも併せもつ絵図も4点ある。いま、1枚の絵図にこのような2種の蔵書印が押された順序を推測すれば、先に上山の蔵書印が押されたと推定されるので、これらの絵図は上記②の藩(主)への正式復命報告ないしその副本とは別系統と考えるべきであり、蝦夷地調査団の筆頭責任者たる上山が所持していた正本の写し(手控)である可能性が高い。
 - ④一方、新渡戸記念館所蔵の絵図と函館市立中央図書館所蔵の絵図を比較すると、前者の中の23枚がそれぞれ後者の23鋪と対応し、それらは「南部藩蝦夷地経営図」に属す21鋪とそれ以外の2鋪に分けられる。前者の21鋪は、函館市立中央図書館の前身たる市立函館図書館で昭和12年6月に開催された展覧会以前に、大正14年設立の「新渡戸文庫」収載絵図から写されたと推定される。一方後者の2鋪は、上記の展覧会の折に出品された南部伯爵家所蔵品から極めて精巧に模写された写本である可能性が高い。なお「南部藩蝦夷地経営図」には、新渡戸記念館所蔵絵図と対応しない絵図2鋪が含まれており、その中の1鋪は蝦夷地踏査・測量図の総括図というべき内容で盛岡市中央公民館所蔵の2点の絵図と対応するが、後者の1鋪は盛岡市中央公民館所蔵絵図のなかにも対応するものがない独自の内容を有している。
- そこで、以上の検討結果を踏まえて、盛岡藩幕末蝦夷地関係絵図に関する今後の検討課題を以下に挙げて本稿の結びとしたい。
- 第一に、盛岡藩蝦夷地派遣団によって作成された踏査・測量図及び関連絵図として藩(主)に提出された正式の復命報告は、29枚

からなる新渡戸記念館所蔵絵図の個々に対応するものだけなのか否か、を解明する必要がある。そのためには、主として盛岡市中央公民館所蔵の多様な幕末蝦夷地関係絵図を改めて詳細に検討しなければならない。その際には、IV章での新渡戸記念館所蔵絵図に対する検討を参考に、表紙の模様、題簽の形と模様、外題・内題の字体、蔵書印の種類とその押印位置、図中の公式の由緒書きの有無、彩色の丁寧さ・鮮やかさ、といった点の識別に留意すべきであろう⁴¹⁾。なお、少なくとも「箱館表井東蝦夷地絵図」は踏査・測量図の総括図というべき内容を備えており、正式の復命報告のAグループの巻首に本来置かれていたと推定される⁴²⁾。

第二に、本稿で検討対象とした蝦夷地関係絵図の特徴をとらえる際に、海岸防備の専門家・現地責任者としての側面から新渡戸十次郎を見ることも必要である。そのためには、彼が責任者として盛岡藩領の太平洋沿岸に建設した砲台場に関する一連の絵図についても検討し⁴³⁾、蝦夷地絵図と比較すると有益であろう。また、新渡戸記念館所蔵の400・401の付箋にある「本家」とは花巻新渡戸家（後の東京新渡戸家）を指すのか、という疑問点についても、今回検討した新渡戸記念館所蔵の絵図以外に新渡戸十次郎旧蔵の幕末蝦夷地絵図が存在するのか否かという点も含めて、改めて再検討する必要がある。

第三に、II章でふれたように、新渡戸十次郎執筆の蝦夷地での行動記録たる『松前持場見分帳』が新渡戸記念館に保管されているので、その丁寧な行動記録をもとに、現存する絵図作成の過程を推測してみることが当然必要となる⁴⁴⁾。

第四に、新渡戸記念館所蔵の上山半右衛門の蔵書印をもつ絵図群は、藩(主)への正式復命報告ないしその副本とは別系統で、蝦夷地調査団の筆頭責任者たる上山が所持していた正本の写し(手控)である可能性が高いと看做

されるが、盛岡市中央公民館所蔵の多様な幕末蝦夷地関係絵図の中に同じく上山の蔵書印を有する絵図はどの程度あるのか。さらにそれらの絵図も一様に上山が所持していた正本の写し(手控)と看做してよいのか、あるいは新たな別系統の可能性もあるのか。これらの疑問に対して、上記の第一の検討課題とも合わせて、改めて調査・検討する必要がある⁴⁵⁾。

第五に、上山半右衛門をはじめ、安政2年に蝦夷地の調査に派遣された一行が、新渡戸十次郎による『松前持場見分帳』のような行動記録や日記・日誌類を遺していないかについて、彼らの経歴も含めて調査する必要がある⁴⁶⁾。さらに、当時の盛岡藩の公式・非公式の記録類に関しても調べを進めることが求められよう⁴⁷⁾。

以上のような検討成果や今後の課題として挙げた点の解明により、近世、とりわけ幕末期の絵図史研究ないし絵図を資料とする歴史地理研究に寄与できればと希望する次第である。

(奈良女子大学・文学部)
(奈良女子大学・文学部)
(徳島大学・総合科学部)
(茨城大学・教育学部)
(奈良女子大学・博士研究員)

〔付記〕

本稿は、2008年5月に宮城県立大学で開催された歴史地理学会大会での口頭発表をもとにしつつ、新渡戸記念館所蔵の絵図に焦点を当てて大幅に内容を改訂して戸祭が素稿を作成し、他のメンバーの教示を得て最終稿としたもので、平成17~20年度科研費補助金〔基盤B-17320132、研究代表者：戸祭由美夫〕による共同研究の成果の一部である。現地調査に当たって貴重な館蔵絵図や関係資料などの閲覧・写真撮影・コピーに便宜を図って下さるとともに、大会口頭発表でのOHP映写も許可していただいた3所蔵機関(十和田市立新渡戸記念館・盛岡市中央公民館・

函館市立中央図書館)の関係各位に心から御礼申し上げます。なお、図2(A~C)の掲載にあたっては、絵図を所蔵する十和田市立新渡戸記念館(館長:新渡戸 明)より許可をいただいた。

〔注〕

- 1) 幕末の蝦夷地における幕府の施策・対応に関しては、①高倉新一郎編『新編北海道史第2巻[通説1]』、北海道、1970、335~366、439~614、641~902頁に詳しい記述があり、②高倉新一郎編『新編北海道史第9巻[史料3]』、北海道、1980、89~161頁や③函館市史編纂室編『函館市史年表編』、函館市、2007、60~149頁は、寛政11年~明治元年の期間における関連事件・事象を年表形式で参照するのに便利である。なお、藩名は当時の公式名称がなかったことから、近年刊行の日本史辞典類でも見出し項目として多様な藩名が使われているため、本稿では国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』、吉川弘文館、1979~97の見出しを用いて、別称を〔 〕書きした。
- 2) 戸祭由美夫「幕末に建設された北海道の围郭—五稜郭の围郭プランのもつ意義の探究—」(足利健亮先生追悼論文集編纂委員会編『地図と歴史空間』、大明堂、2000)、303~315頁。
- 3) 本稿で扱う盛岡[南部]藩の絵図では、これら軍事施設は「陣屋」「台場」「番所(番処)」に区分されて記されており、さらに「陣屋」は「元陣屋」「出張陣屋」「屯所」に細分される。以下、特に必要がない限り「陣屋」を細分して表記しないこととする。
- 4) 現在の観点からすれば、「地図」「絵地図」「絵図」「古地図」など、いずれの呼び方もこれらの作図法や内容を包括的に言い表しているとは言いがたい。また逆に、「図」と呼ぶのは、彩色されている場合の多い本稿の対象を表現するにはあまりにも一般的過ぎる。そのため、学会発表の際には「絵地図」と呼んでいたが、川村博忠『近世絵図と測量術』、古今書院、1992、1~54頁にいう「近世絵図」の概念を参考に、近世末に

作製された絵図類という意味で「絵図」と呼ぶことにした。

- 5) 前掲4) 36~54頁(第2章 近世絵図の種類)。しかし、同書の4頁では、ほかに「城下絵図」「川筋絵図」を挙げている。
- 6) ①矢守一彦『都市図の歴史 日本編』、講談社、1974。②川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』、古今書院、1984。③川村博忠『国絵図』(日本歴史叢書44)、古今書院、1989。④小野寺淳『近世河川絵図の研究』、古今書院、1991。⑤国絵図研究会編『国絵図の世界』、柏書房、2005。⑥鳴海邦匡『近世日本の地図と測量一村と「廻り検地」』、九州大学出版会、2007。
- 7) ①船越昭生『北方図の歴史』、講談社、1976。②秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』、北海道大学図書刊行会、1999。
- 8) ①高倉新一郎編『北海道古地図集成』、北海道出版企画センター、1987。②高木崇世芝『北海道の古地図(函館文化発見企画2)』、五稜郭タワー、2000。
- 9) 磯永和貴「地域史のなかの絵図」、歴史学研究841、2008、55~63頁に現時点での包括的なまとめがなされている。
- 10) このような現状にあって、幕末の蝦夷地陣屋を特集した『北海道の文化』20,1971の特集「陣屋」15~65頁で、陣屋に関わる絵図も掲載しつつ論じられていることは大いに評価される。なお、絵図の記載内容を理解しやすいように書き起して図化したものは地方史誌にも散見される。
- 11) 吉村博通『市立函館図書館蔵 函館の古地図と絵図』道映写真、1988。
- 12) <http://archives.c.fun.ac.jp/oldmaps/include/main/>
- 13) 「原本の科学的分析」「絵図師とその測量技術」「古地図の体系化と所在データベースの構築」「高精細デジタル画像の提供と分析ツールとしてのGIS」「絵図の保管と利用に関する研究」「写図と写す行為の研究」の6つ(小野寺淳「近世絵図資料論の課題—国絵図研究会の活動を通して—」、歴史学研究842、2008、28~31頁)。
- 14) 盛岡市中央公民館長を勤めた高橋清明が、

- 同館の成立経緯や所蔵品について紹介している（高橋清明『南部史考』、盛岡歴史研究所、2008）。
- 15) 新渡戸記念館は、大正14（1925）年に設立された新渡戸文庫を基礎に、昭和40（1965）年に開館し、太素顕彰会が管理運営している（新渡戸憲之・新渡戸明『十和田市・三本木原開拓と新渡戸三代の歴史ガイドブック 改訂版』、太素顕彰会、2008）。なお、次節の本文も参照のこと。
- 16) 青森県立郷土館 歴史分野「八戸南部家文書中の絵図史料について」、調査研究年報（青森県立郷土館）24、2000、39～58頁。
- 17) 下記の報文に、同館所蔵の青森県東部海岸（旧北郡）の海岸砲台絵図一覧がある（青森県立郷土館 歴史分野「弘前藩の絵図史料および新渡戸記念館海岸大砲台場絵図について」、調査研究年報（青森県立郷土館）25、2001、47～50頁）。
- 18) 新渡戸 傳が太素と号したことから、その墓地を太素塚と称す。また、新渡戸稲造は十次郎の三男で、長男七郎の死去により、養家の大田氏から戻って七郎の養子としてその跡を継いだ（前掲15）92～93頁）。なお、新渡戸 傳の生涯については下記の①の上巻に詳しく、三本木原台地一帯の開拓に関しては、①の中・下巻が新渡戸記念館所蔵の資料を集めたもので、②は開拓の根幹となった用水路（稲生川^{いなおいがわ}）掘削に関して平易に書かれたものである。①積雪地方農村経済調査所編『三本木開拓誌』上・中・下（非売品）、1944・1945・1947、384・858・824頁。②十和田市立新渡戸記念館編『稲生川・水の旅路』、太素顕彰会、2005、56頁。
- 19) 「新渡戸氏系譜」によれば、新渡戸家は桓武平氏高望流を称し、盛岡在住の盛岡新渡戸家が本家である。萬延元（1860）年の「三本木平開業之記」には開発領主として、「新渡戸傳 平常澄、同 十次郎 平常訓、同 邦之助 平常光」と記されている（前掲15）97～99頁、107～108頁）。
- 20) 「陣屋」のなかで「元陣屋」とは、蝦夷地警備の基幹となる陣屋の意味で用いられ、警備範囲が広範なためにその補助をなす「出張陣屋」や、さらにそれから警備人員を分遣される小規模な困郭たる「屯所」を統括した（前掲3）参照のこと）。
- 21) 2007年8月の調査に同行した村上由佳（奈良女子大学・博士研究員）・中尾千明（奈良女子大学・院生）の両名が戸祭の指示の下で解読作業を進めており、その解読成果の概要は村上・中尾の連名で口頭発表された（村上由佳・中尾千明「安政2年における盛岡藩の蝦夷地持場の見分に関する予察—「松前持場見分帳（十和田市立新渡戸記念館所蔵新渡戸家文書）」の分析から—」、日本地理学会発表要旨集74、2008、99頁）。
- 22) 前掲17) 31～32頁、36～37頁、47～50頁。
- 23) 前節でふれた新渡戸十次郎『松前持場見分帳』3丁表にも「箱館表出岬御警衛専用二相心得、エサン岬ヨリ東蝦夷地ホロヘツ迄之海岸相体持場之事」と命じられた事が記されている。なお、当時の蝦夷地は、北海道から南千島にいたる太平洋側の東蝦夷地、北海道日本海側の西蝦夷地、樺太の北蝦夷地に大きく3分割して把握されていた。
- 24) この絵図調査票を用いた成果として次のものがある。平井松午「徳島大学附属図書館蔵の『近世古地図・絵図コレクション』の来歴」、徳島地理学会論文集4、2001、179～191頁。なお、近世絵図の調査票に関しては、国絵図研究会の場合については、上原秀明・儀永和貴「国絵図調査法」（国絵図研究会編『国絵図の世界』柏書房、2005）が詳しく紹介している。
- 25) なお、上記のような公式の由緒書き以外の奥書あるいは注記ないし但書きとしては、398で陣屋プランの下に「陣屋後通山際江寄土手築立ニ及はず、往來自由ならさる程に堀切置可申、尤堀出し之土丈八大手に積立可然作候事」（図2B参照）、399で内題に続いて「但、ヲエナオス、是迄松前家勤番御座候ニ付、右御渡ニ相成候得共、相建候ニ不及候事」（ともに読点を補った）の2つがあり、ともに行書体で記されている。
- 26) この一連の「松前図」は、表1にも記すように、幕府が直轄支配をしない時期の松前

藩支配地、すなわち蝦夷地を描いている。そして、この絵図が南樺太までしか描かれなかったのを補うものが、北蝦夷地の全体を描く「カラフト図」であったと考えられる。なお、当時の幕府による蝦夷地の地理観については前掲23) 参照。

- 27) 「松前持場見分帳」を解説した村上・中尾両氏の教示によれば、新渡戸十次郎の蝦夷地への往路は大畑浦から出帆して箱館に到着し、帰路は箱館より出帆して異国間村に到着したということで、大畑浦も異国間村も盛岡藩領であった下北半島の津軽海峡に面した地である。
- 28) 花巻新渡戸記念館によれば、同館が保管・展示している花巻新渡戸家関係の所蔵史料は花巻地方の近世地方文書・絵図類に限られ、幕末蝦夷地関係史料は無いとのことである。
- 29) 科研による共同研究（[基盤B-17320132, 研究代表者：戸祭由美夫]）の一環として、盛岡市中央公民館へは2005年11月23～26日（戸祭・出田・平井・小野寺・中西の5名）に、函館市立中央図書館へは2006年1月6～8日（戸祭・平井・小野寺の3名）及び同年4月27日（戸祭・出田の2名）の2度調査に赴き、館蔵の絵図の閲覧・撮影をさせていただいた。また、精確なデジタル画像を必要とする絵図については、別途専門業者による撮影を行い、また後者所蔵絵図の場合には撮影済みのデジタルデータのコピーをいただいたものもある。
- 30) 本稿では、新渡戸記念館所蔵絵図の場合には助数詞として「枚」を用いてきた。以下、他の2館所蔵の絵図と比較する際の誤解を防ぐために、助数詞として盛岡市中央公民館所蔵絵図の場合には「点」を、函館市立中央図書館蔵絵図の場合には「鋪」を用いることとする。
- 31) 蔵書印に関しては、2008年6月の戸祭による再調査で点検・確認した。（なお、41) 参照のこと。）
- 32) この蔵書印の判読不能な1字は、「止」を偏とし「主」を旁としている。康熙字典にもない文字で、蔵書印作成者の造字であろう

う。また、M65-2ではこの蔵書印の直上に「上山主」の文字が記され、M53-2の裏表紙に「安政三辰三月 上山主」と記されていることから、年代的にも「上山主」とは上山半右衛門が自を指す略称であり、その略称で自署し、その蔵書印の一つを押したと推測される。

- 33) 「上山氏所蔵」の蔵書印をもつM65-4の端裏には、M53-2の裏表紙と同じく「安政三辰三月 上山主」と記されており、このM65の絵図セットには「上山口蔵書印」をもつ絵図と「上山氏所蔵」の蔵書印をもつ絵図が混在している。それらを考え合わせると、ともに上山半右衛門の蔵書印と推定される。なおこれら蔵書印の判読は、松尾良樹氏の御教示による。記して謝意を表します。
- 34) 函館市立中央図書館所蔵の絵図の刊行・公開については、前掲11), 12)。
- 35) 前掲30)。
- 36) 「新渡戸文庫」とは新渡戸記念館の前身である新渡戸文庫の誤記であろう。前掲15) 参照。
- 37) 絵図の印影をみると、23鋪の全てに同館が津軽要塞司令部検閲用に作成した貼紙が付され、10.2.16の日付の同司令部検閲済の丸印が押されている。うち5鋪の表紙には、「みなと祭／東京市」に出品された旨の円形の貼紙が左上にある。また、『昭和12年6月南部藩蝦夷地警備資料展覧会出品目録』（市立函館図書館）によれば、「伯爵南部家所蔵」の出品目録の中に「14、箱館表縮図 写折図 一鋪」があり、「函館図書館蔵『南部藩蝦夷地経営図』の内の表記図一枚と同じ。」との説明が記されている（旧字は常用漢字に改めた）。したがって、昭和10年2月以前より同館に「南部藩蝦夷地経営図」セットが所蔵されており、その上限は「新渡戸文庫」設立の大正14年と考えられる。
- 38) これら2鋪の絵図名称は相互に異なるが、同館では請求番号は同一である。そのため、調査に当たった当方で便宜的にH6012-(1), H6012-(2)のように枝番を付した。
- 39) 前掲37) の「伯爵南部家所蔵」の出品目録の

中に「10、箱館御陣屋の図 写 折図 一鋪」と「11、箱館字水元曠野之内元陣屋地之図 写 折図 一鋪」がある。

- 40) この展覧会出品物で「即ち函館図書館に所蔵なきものは副本を作成し」と巻頭に記されている。なお、3館に所蔵されている同種の5枚の絵図に関しては別の機会に論じたい。
- 41) 本稿の基礎となった2008年5月の学会発表後、同年6月4～6日に戸祭が盛岡市中央公民館でこれらの点に留意した調査を再度行い、その成果を同年10月開催の日本地理学会・東北地理学会合同秋季春季学術大会で口頭発表した(戸祭由美夫「盛岡市中央公民館所蔵の南部盛岡藩幕末蝦夷地関係絵地図の分類試案」, 日本地理学会発表要旨集74, 2008, 98頁)。
- 42) 「南部藩蝦夷地経営図」筆写の原本である「新渡戸文庫」収載の一連の蝦夷地関係絵図にも含まれていたと考えられるが、何らかの理由で現在の新渡戸記念館所蔵絵図から欠落したのであろう。
- 43) 盛岡市中央公民館では、「沿岸砲台図」(目録番号35-5-74)・「大槌通り吉里吉里村碓川砲台図」(同35-5-75)・「閉伊郡吉里吉里台場圃」(同35-5-76)・「閉伊郡吉里吉里台場台図」(同35-5-77)・「北郡大砲台場」(同35-5-78, 79)としてまとめて保管されている。新渡戸記念館での保管分については前掲17)参照。
- 44) 前掲21) 参照。
- 45) 戸祭は前掲41) の学会発表において、新渡戸十次郎旧蔵の絵図の場合と同様に、上山

半右衛門がその職責(蝦夷地留守居かつ蝦夷地調査団の筆頭責任者)に関わって正本から書写・所持していたものと推定した。しかし小野寺は、蝦夷地に派遣された一行により正本に先立って作製された下図というべきものがその中に含まれていると考えており、その下図作製者こそ、絵図の公式の由緒書きの末尾に「長澤文作」の名で載る絵図師「長澤盛至」であろうと推定している。

- 46) 砂原町史編さん室編『砂原町史1通説編』, 北海道砂原町, 2000, 275～276頁によれば、その根拠資料は示されていないものの、「持場見分測量の命をうけた南部藩士長澤盛至は安政二年六月廿三日、箱館表を出立して…一日の測量を約六里の日程で海陸の二手に分けて島廻りの里程と地形地名入りの絵図作成にとり組んだ。…箱館よりフシコヘツ迄の六十二里余を測量した。」と記されている。なお、前掲45) 参照。
- 47) 盛岡藩の幕末期の藩庁日誌として「覚書」があり、盛岡市中央公民館に所蔵されている。マイクロフィルム化されているのみならず、逐次編集刊行されているが、安政年間の分は未刊行。また、前掲37) の昭和12年6月開催展覧会での「伯爵南部家所蔵」出品目録の中にも、同書の安政2年の分を含む原本10冊が挙げられている外、同時期の盛岡藩箱館詰関係の文書を抜書きした「箱館御留抜書」1冊や上山半右衛門の箱館引揚げ後の「上山公務日記抜書」27冊も挙げられている。

Bibliographical Approach to Nineteenth Century Pictorial Maps of Ezo Province Owned by the Nitobe Memorial Museum

TOMATSURI Yumio, IDETA Kazuhisa, HIRAI Shogo, ONODERA Atsushi and NAKANISHI Kazuko

The authors visited three facilities in their search for old pictorial maps of Ezo Province made by the Nambu-Morioka clan at the end of the Tokugawa Shogunate: Hakodate City Central Library, Morioka Central Public Hall and Nitobe Memorial Museum. In this paper, twenty-nine old pictorial maps held by the Nitobe Memorial Museum are analyzed from a viewpoint of bibliographical study.

This museum holds twenty-nine pictorial old maps owned by Mr. Nitobe Jujiro, the deputy leader of the mission detached by the Nambu-Morioka clan. These maps can be classified into five groups (A1a~B).

[A1a] : Five survey maps of fortified base-camps situated in Hakodate.

[A1b] : Six survey maps of fortified camps, gun batteries and lookouts situated around Funka Bay.

[A2a] : Seven route maps of the northern seashore of Tsugaru Strait from Hakodate to the west which borders on the area guarded by the Matsumae clan.

[A2b] : Five route maps from the southeastern shore of the Oshima Peninsula to the east which borders on the area guarded by the Date-Sendai clan.

[B] : Six maps of the whole or a part of Ezo Province.

The authors analyzed them closely, comparing them with those held by the other two museums. As a result, the following conclusions were drawn.

1. The same notes can be seen on all 23 maps of Group A (A1a~A2b) of the Nitobe Memorial Museum's collections. The notes indicate that the maps were the official ones drawn by the Nambu-Morioka clan's detached mission.
2. Five maps in Group B were contemporary copies of those belonging to the Hakodate Commissioner's Office of the Tokugawa Shogunate.
3. Similar maps appear in the Morioka Central Public Hall's collection and Hakodate City Central Library's collection as in the Nitobe Memorial Museum's collections. Moreover, in the Morioka Central Public Hall's collection, there are mostly two or three copies of each map of the Nitobe Memorial Museum's collection.
4. At least one copy of each set of maps held by Morioka Central Public Hall bears the ownership stamp of the lord of Nambu-Morioka clan.
5. We therefore deduce that the Morioka Central Public Hall's collection holds both an original and a duplicate copy of maps that were dedicated to the lord of Nambu-Morioka clan by this clan's detached mission, while the Nitobe Memorial Museum's collection holds a private copy of those maps made by Mr. Nitobe Jujiro himself.
6. Alongside the ownership stamp of the lord of Nambu-Morioka clan, the ownership stamp of Mr. Ueyama Han'yemon, the commander of the mission, can also be found on four maps in the Morioka Public Hall collection. We presume that these maps must have been owned by Mr. Ueyama.
7. A note attached to one of the maps stored in Hakodate City Central Library states that the maps were traced from maps of the Nitobe's collection. In that case, the tracing appears to have been undertaken by the Library in recent times as a part of its referencing and materials collection operations.
8. Further study into old pictorial maps of Ezo Province made by the Nambu-Morioka clan at the end of Tokugawa Shogunate is required, in particular those held by the Morioka Central Public Hall.

Key words: old pictorial map, Ezo Province, end of Edo period, Nambu-Morioka clan, Nitobe Memorial Museum